

微笑むもの

T a t s u r u U C H I D A



内田 樹 (凱風館館長、神戸女学院大学名誉教授)

1950年東京都生まれ。東京大学文学部仏文科卒。合気道道場・凱風館館長。神戸女学院大学名誉教授。合気道7段、杖道3段、居合道3段。ブログ「内田樹の研究室」で様々なテーマを縦横に論じている。『私家版・ユダヤ文化論』で第6回小林秀雄賞、『日本辺境論』で第3回新書大賞受賞。他に『下流志向』『呪いの時代』など著書多数。

合気道という武道を長く修業している。師の多田宏先生には二人先達がいる。一人は心身統一法の中村天風先生で、天風先生は「笑っているとき、人間はもっとも強い」という言葉を残された。もう一人は合気道開祖植芝盛平先生で、植芝先生は「稽古は常に愉快に実施するを要す」という道場訓をつくられた。ふたりの達人が道破したとおり、人間は微笑んでいるとき、動きの速さも、出力のつよさも、運動精度も、最高になる。これは長く修業をしてきた経験的確信に通じている。

もし武道があらゆる危機的環境を生き延びるための「命の力の高め方」についての技術の体系であるならば（そのはずだが）、「不機嫌な武道家」というのは形容矛盾であるだろう。

ただ、ここでいう「笑い」や「愉快」は演劇的な哄笑や痙攣的な愉悦とは無縁のものである。それは身体の内側からゆっくりにじみだす、いつ始まっていつ終わるのかわからないような穏やかで落ち着いた笑顔でなければならない。

どうすればひとはそのような愉快感を継続させられるのか。それは外から何か「気分がよくなる入力」が到来して、それに感化されて気分がよくなるというような受動的な経験のはずがない。「先を取られる」ということは武道的にはあってはならないことだからである。

私が「終わることのない静かな笑顔」に近いものを自分の表情の上に見たのは、親となって幼い娘を

育てているときであった。眠る嬰兒を腕に抱いて、その柔らかい身体にそっと手を添え、熱さを感じ、健康な吐息を肌を受けているとき、私は鏡に映っている自分の顔に、それまで見たこともない種類の静かで、穏やかな笑顔を認めた。そのときの構えはなかなか均整のとれたものであった。

考えてみれば当たり前のことだが、哺乳類の成獣が幼児を守るときの動きは、生物学的必然として、最小エネルギー消費で、最大の出力を生み出す、最強最速のものでなければならない。改めて注視してみても、武道の型のいくつかは「幼児を抱く構え」をゆるやかに作り、それをたわめ、崩し、またつくるという一連の流れから成ることに気づいた。それらの運動は、学習するまでもなく、人間の生物学的深層に刷り込み済みだったのである。

滑らかで、滞りのない運動をしているとき、ひとは心身ともに「わが子を抱いている気分」に近づいている。そのときの「親」は、どのような不意の出来事にも対応できるように、居着かず、力みや詰まりがなく、「起こり」（予備動作）抜きでいきなり最適動線に身を投じることができる穏やかな開放状態のうちにある。そのときの「ふわり」とした立ち姿がおそらくは武道的な身体のひとつの理想なのである。

微笑むものは、怒りや悲しみや憎しみに捉えられたものよりも、高い確率で生き延びる。達人たちはそう教えているのだと私は理解している。